

第4節 山梨県の山岳信仰遺跡

櫛原 功一（帝京大学山梨文化財研究所）

1 はじめに

本稿は山梨県内の山岳信仰遺跡を概観し、富士山信仰との関わりを考えるものである。富士山については、従来の研究成果の蓄積と今回の山麓各地での試掘の成果に委ねることとし、富士山を除く県内の山岳信仰遺跡の分布、内容、地域的な傾向を整理する。

ところで、「山岳信仰遺跡」とはどのような遺跡を指すのであろうか。一般的に「山」は平地よりも高く隆起した地形、谷と谷に挟まれた凸起部を指し、「山岳」とは山の複合的な状態をいい、著しく隆起した山という意をもつが、「山岳信仰遺跡」の場合の山岳とは、自然地形としての「山」全般を指し、山麓から山頂までの山に存在する信仰遺跡、と理解したい。「山岳信仰遺跡」の用語には、山岳信仰に関する遺跡、あるいは山岳に所在する信仰遺跡、と2通りの捉え方ができるが、ここでは後者の立場をとる。

「信仰遺跡」認識の基準としては、信仰・祭祀に関する遺構、遺物の存在を第一義とし、磐座や経塚、山岳寺院跡などが該当する。副次的には山中の場に信仰関連地名、祠や寺社、信仰に関する史料・伝承・石造物、信仰の場にふさわしい自然要素（巨石、奇岩、窟、滝、池、川、湧水、温泉、樹木など）などが存在し、山容・地形・景観・眺望などその場の雰囲気が神聖を帯びるとき山岳信仰遺跡として認識可能で、山中の遺構、遺物と密接な関わりをもつことが明らかなとき歴史性に鑑み、総合的に判断して山岳信仰遺跡と呼びうる。つまり山中でテラス群などの遺構、生活廃棄物などの遺物が発見されただけでは信仰遺跡と認定することは難しく、副次的な要素を伴う場合に信仰遺跡とすることができるだろう。また山岳信仰では山を神聖視して人為的な造成痕跡（遺構）を残さないことがあり、通常の遺跡とは異なる判断基準を要する。

山岳信仰遺跡は山中の遺跡が単独、自立的に存在したのではなく、遺跡の性格にもよるが、周辺山中のいくつかの関連遺跡からなる遺跡群として存在する事例や、いくつかの異なる要素が遺跡群のセットとして存在する事例があり、それらは山麓の山口から山頂に至る山道の中に意味をもって配置する。時期的に限定的な遺跡もあるが、たいていは遺跡として時間幅をもつ場合が多い。麓に目を転じると、信仰心を寄せた人々の居住、生活域が山麓から平地、川の流域に存在し、山中の活動を通じて里と山とが結びつき、山での宗教活動を支える経済基盤となる。視覚的には里から山を望むことができ、逆に山から里を見下ろすという可視性を認めうことが多い。山麓に里と山との仲立ちをする寺社や御師の存在をみることがあり、山宮、奥の院が山中に残ることがある。また、一定の地域内の信仰遺跡が関係をもつという指摘もあり、広域的な関連性にも目配りする必要もある。

山梨県内の山は、甲府盆地を取り囲むように連続的に存在し、県西部に南北に連なる南アルプス（赤石山脈）、県北部の奥秩父、北西にある八ヶ岳、静岡県境の富士山を主とし、奥秩父から南にのびる大菩薩連嶺、笛子峠以西の御坂山地、本栖湖付近以南の天子山地、郡内方面の道志山塊などが分布するが、ここでは北巨摩方面、南巨摩方面、甲府盆地北東部、御坂山地・郡内方面にわけて説明する（遺跡番号は図1の番号と対応する）。

2 北巨摩方面の山岳信仰遺跡

赤岳（2899 m）を主峰とする八ヶ岳の権現岳（2715 m 1 櫛原 2003）は、八ヶ岳信仰の中核的な山である。山頂には檜峰神社の石祠を祀り、周囲に胎内ぐりなどの行場がある。昭和57年に社殿遷座のため石祠を移したところ、石祠台石下から薙鎌3、剣形鉄製品2、不明鉄製品3、北宋銭4が発見され、さらに同地点の石祠脇の崖より和鏡1、薙鎌1、開元通宝1が採集された。八ヶ岳信仰は近世以降、南麓を中心に八ヶ岳講として地域的な発展をみたもので、和鏡、薙鎌、銭貨の存在から中世段階の様相を権現岳の遺物に見出すことができる。

南アルプスの地蔵ヶ岳（2764 m 2 菖崎市 2011）は、山頂のオベリスクとも呼ばれる三角錐形の特徴的な岩塔が特徴的で、北側には石空川、東側にドンドコ沢が流下して多数の滝を形成し、川の源流、滝、岩塔を山岳信仰の構成要素とする。現在、地蔵ヶ岳、観音岳、薬師岳の三峰を総称して鳳凰山（三山）と呼ぶが、近世には現在の地蔵ヶ岳のみを鳳凰山といい、岩塔をくちばしに見立て、翼を広げた鳳凰に擬す説のほか、大日岩、地蔵



図1 山梨県の山岳信仰遺跡分布図

岩、オオトンガリ、鳥岩という呼び名をもつ。大日岩という名称は岩塔そのものを胎蔵界の中心、大日如来とみるもので、地蔵岩とは岩塔の容姿から生じた名称であるが、岩塔西側には花崗岩の風化した砂礫地「賽の河原」に地蔵石仏群があり、岩塔が近世以降、地蔵信仰と結びついたことを示している。『役行者本記』に役行者開山として記載されることから、室町期にはすでに修驗系靈山であったらしい。高さ約20mの花崗岩の岩塔南面には「鳳凰山大神」等の石龕を祀り、「天文云々、大日云々と刻された小石龕と仏像六体を見た」とあるが（辻本1908）、現在文字は判読できない。また『峠中紀行』には山頂の祠に掛鏡（懸仮）があったと記すが、現在、岩塔直下の鳳凰小屋周辺で採集された直径30cmの大日如來懸仮が個人蔵として知られている。鳳凰小屋は「北御室小屋」と呼ばれ、山岳寺院があったといわれるが、甲府市桜井町の鳳凰山東禪寺は武田信虎が鳳凰山の山頂から下したと伝える鎌倉期の宝冠釈迦像を本尊とする。岩塔及び賽の河原では、薙鎌10のほか剣形鉄製品などの鉄製品、銭貨等の信仰遺物が発見されている。銭貨は岩塔南側に主に分布し、中世段階で奉賽銭を伴う岩塔参拝が岩塔南面を中心に行われたことを示す。また賽の河原では18世紀後半代とみられる寛永通宝鉄銭に限られ、場の形成時期を示している。

甲斐駒ヶ岳 (2966 m 3 櫛原2003) は南アルプス北端の独立峰で、将棋頭形の山容を特徴とする。大武川上流の横手駒ヶ岳神社、尾白川上流の竹宇駒ヶ岳神社の2箇所を登山口とする黒戸尾根ルートを正式な登拝ルートとし、山頂には駒ヶ岳神社本宮・奥の院を祀り、文政年間に弘幡行者によって駒ヶ岳講が成立し、今日に至るまで盛んに信仰登山が行われた結果、山中には夥しい数の比較的新しい講関連石造物や剣形鉄製品などの奉納品を祀る。昭和63年に山頂の三角点設置場所付近で採集された土器は無文で、時期は定かではないが胎土・色調から縄文後期と推定され、日本最高地点発見の縄文土器かと話題になった。また平成14年には、同地点で先に採集された土器と同一個体とみられる台付土器の脚部片を得ている。文様が明確でないが、古墳時代台付甕の可能性が高く、山頂への意図的な土器の置き去り、遺棄とみなして山岳信仰の初期の例として扱われている。

富士山に次ぐ高さを誇る**北岳** (3193 m 4) は「白峯三山」のうち北側にあることから北岳といわれ、『役行者本記』には役行者開山の靈山とされるが歴史的には新しい。寛政7年 (1795) に白根大日如來を祀り、明治2年に芦倉の行者、名取直衛が官許を得て登山道を開き、甲斐ヶ根神社を祀ったという。芦安芦倉には高さ9.5

cmの銅製大日如来像があり、明治中頃までは山頂石祠内に祀られていたといわれる。懸仏の鏡板に付けられた半肉彫りの本尊像で、室町以前に遡る資料である。

苗敷山（1037 m 5 萩崎市 2011）は萩崎市旭山にあり、麓には式内社比定の穂見神社里宮が鎮座し、山頂に奥宮がある。奥宮までの参道には元禄4年（1691）に整備された丁石が立ち、十三丁目には寛文4年（1664）の石鳥居が立つ。山頂境内は穂見神社奥宮と廢仏毀釈により消滅した苗敷山宝生寺の神仏混合した宗教空間で、山門跡、隨神門跡、鐘楼跡、客殿・庫裏跡の礎石群やテラスが残る。平成13年、奥宮裏手から北側の山頂付近で行われた林道建設の際に斜面で豊穴断面が見出され、発掘調査の結果、10世紀後半を主とする重複した豊穴住居6軒分が検出された。出土遺物には燈明痕をもつ土師器が目立つほか、墨書き土器、緑釉陶器碗がある。現在残る奥宮は元文元年（1736）の社殿を明治・昭和に修復したもので、礎石群は出土陶磁器類から19世紀中頃をピークとするが、いくつかのテラスに10世紀代の土師器片が分布し、奥宮拝殿床下で採集された三筋壺片は12世紀後半、奥宮にあった推定三宝荒神の明王形立像は13世紀前半で、応安2年（1369）、永正6年（1509）銘の石灯籠竿の存在から、10世紀後半以降、中世から近世にかけて山岳寺院として成立、発展したと考えられる。苗敷山の山容には大きな特徴がないが、甲府盆地の開拓と稻作伝播に関する六度仙人の伝説をもち、甲府盆地の湖水伝説に関連するほか、背後の椹池や湿地祭祀との関連性が指摘されている。また苗敷山は鳳凰三山の前山として修験ルートの起点となる山と考え、甘利山、千頭星山、天狗岩の岩屋（窟）、薬師岳磐座下の岩屋などをルート上に置く説がある（山本2011）。

苗敷山周辺の標高1000m付近の山中にはいくつかの池が信仰の場となっているが、御勅使川支流の御庵沢の水源にあたる**大笹池**（6 齋藤2011）は、御勅使川流域の原七郷と呼ばれる地域の雨乞いの池であった。原七郷から大笹池に向うルート上には善應寺があり、観音堂に祀られている一木作りの平安仏は池中から出現したという伝説をもち、境内では経塚が見つかっている。同様に雨乞いの池と知られる事例に御坂山地の事例ではあるが市川三郷町の**四尾連湖**（7）があり、祈雨祈願に牛馬骨を投げ込んだといわれる。

山岳信仰に含めうるかどうか微妙だが、八ヶ岳の泥流が釜無川の浸食により断崖を形成した七里岩先端には**萩崎窟觀音**（仏窟山雲岸寺）がある（370 m 8 櫛原2006）。南向きの断崖をえぐって二つの四角い窟を設け懸造の拝殿としていて、富士山の眺望がよい。天長5年（828）の創建と伝え、現在の建築は寛正6年（1465）に懸造として造られたのち、正徳5年（1715）以降、修復が繰り返されたといわれる。そのほか七里岩にはいくつかの窟状の穴があり、例えば烏帽子岩は「方三歩許リノ岩窟アリ昔一禪僧アリテ此ノ窟ニ座禅シ遂ニ此ノ潭ニ身ヲ投ジテ滅ヲ取り」（『甲斐国志』）と記すように修行窟として利用された窟が存在する。

山中の窟としては北杜市須玉町黒森の**岩屋觀音堂**（1250 m 9 櫛原2008）が知られる。幅10.1m、奥行7.6mの自然窟を利用し、逆V字形の窟を軸として開き戸をもつ一面の板壁を設置し、窟全体を堂に見立て、窟奥に如意輪觀音を祀る。板壁裏には幕末（天保、弘化、安政等）の参拝記念墨書きが多数残り、参拝者の来歴を知ることができる。この窟で注目されるのが窟上部の岩が高く隆起することで、窟を陰、突出した岩を陽として陰陽合体した岩場を一周し觀音石仏を巡礼しつつ、岩場に取り付いて頂に至る禪定体験の場となっていて、甲府市岩堂觀音と同様、近世に栄えた觀音靈場の一例といえる。

3 南巨摩方面の山岳信仰遺跡

身延山（1153 m 10）は文永11年（1274）、南部（波木井）実長の招きで鎌倉から入った日蓮が庵室を構え居住した地で、弘安4年（1281）に大坊を建立して久遠寺と命名した。当初、西谷にあった堂宇は、十一世日朝上人が文明6年（1474）に身延山中腹を造成して現在地に移し、伽藍整備を行ったといわれる。その後、近世になると紀州・水戸家や加賀前田家等の帰依で繁榮し、東谷、西谷などに多くの子院が成立して今日に至るまで日蓮宗総本山として大いに隆盛した。境内から山頂奥の院思親閣に至る参詣道沿いには丈六堂、大光堂、法明坊を配し、道沿いには三十六、三十七、三十八丁目に寛永13年（1636）建立の板碑型丁石が残り、七面山や苗敷山の丁石造立に影響を与えたものと思われる。久遠寺裏手にあたる「上の山」には各地の大名供養塔や、信徒の数千基もの石塔類が存在し、寛文期に本堂の諸堂宇が移転した地区として本地堂、鬼子母神堂などがあり、

その一帯を中心に多数のテラス群が存在し、坊院群の変遷をうかがうことができる。

身延山の奥の院として控える七面山（1982 m 11 七面山 2011）は、早川支流、春木川上流に登山口があり、対岸には白糸の滝、雄滝の2つの名瀑が存在する。身延山山頂の奥の院から感應坊を経て赤沢宿に至り、滝での禊のうち七面山を目指すのが正式とされ、急な尾根道を約3時間かけて登ると、山上の七面大明神を祀る敬慎院に至る。その間五十丁で、初丁目から敬慎院山門までの間に1丁ごとに丁石が立ち、途中に神力坊、肝心坊、中通坊、晴雲坊がある。敬慎院の建物群は一の池の東側に配置し、その東側の一段高い位置に建つ隨身門前方には真正面に富士山がそびえ、富士山からの御来光を遥拝する場となる。彼岸の中日には富士山頂から隨身門を通じて敬慎院の本堂に光が差し込む仕組みとなっていて、背後の池を祭祀の中心としつつ、富士山遥拝を強く意識した計画的、意図的な空間構成を示す。また北方には七面大明神出現の伝えをもつ影向岩を祀る奥の院があり、やはり富士山遥拝の場となっている。このように山岳信仰の典型的な構成要素としての白糸の滝、雄滝、一の池、影向岩に加え、富士山遥拝という要素をえたところに大きな特徴がある。

七面山信仰はもともと山上の池を祀る水神信仰に起源をもつ山岳信仰とみられるが、身延山信仰に組み込む過程で、日朗上人が波木井実長の案内で永仁3年（1295）9月19日に登ったという開山伝承が生まれ、とくに徳川家康の側室、養珠院（万）が七面山参詣を行い女人禁制を解いてから日蓮宗信者の登拝が急増したという。慶安4年（1651）の七面山の所有を巡る赤沢と雨畠の境争論のうち久遠寺管理下となると山上堂社の整備が進み、万が承応2年（1653）に亡くなり本遠寺に葬られたのち、七面山の登拝道沿いには結縁を求めた人々が供養塔の題目塔や、供養塔を兼ねた丁石を各丁目に建立し、登山道が急速に整備された。七面山参道の供養塔としては承応3年（1652）例を最古とする板碑型町石が出現し、元文3年（1738）には角柱型丁石に立て替えが行われ、文政年間（あるいは文化年間）に石灯籠型町石へと大きく変身し、それを受け継ぐように平成21年に真新しい石灯籠型丁石を設置している。山中には中世に遡る石造物が存在しないが、登り口の明淨院裏の墓地に承応4年（1653）以降の多数の石塔類とともに青石（緑色片岩）製の武藏型板碑が存在する。長さ70cm、幅20cm、厚さ2.5cmで、梵字キリーケの下に「正和元年十一月日」（1312）と陰刻する。開山伝承に合致する資料として重要視すべきではあるが、県内では板碑が富士川以西で未発見なうえ、国中地域に数例知られる事例については由来が疑問視されていて、本事例に関しても確認時の状況から後世の持ち込みの可能性が指摘されている。ただ赤沢集落にある妙福寺はもと真言宗妙福庵といい、建治3年（1277）に日朗上人により日蓮宗に改宗したと伝え、また祭神、子安八幡大菩薩像には天福元年（1233）の銘があるとされ、早くから七面山が開かれていたと考えられることから検討を要する。

篠井山（1394 m 12 山梨県 2003）は富士川右岸の南部町にあり、山頂からは富士山を東に望む景勝地で、甲斐国司の從四位凡河内躬恒にちなんで「四ノ位山」ともいわれる。山麓には南部町御堂、楮根、成島の3集落に登山口があり、山頂には各集落が祀る篠井（四ノ井）大明神の社が3つあり、かつては雨乞い祈願が行われ、成島の登山口にある要行寺と定隆坊は篠井山信仰の拠点であった。明治24年（1891）、楮根集落が管理する祠の下から経塚が発見され、12世紀中頃の渥美窯の藤原顯長・惟宗遠清銘短頸壺のほか、12世紀後半の渥美甕、13世紀中頃の常滑甕および「唐銅ノ蓋」が木炭を充填した礫郭内から見つかり、少なくとも2基の経塚が存在したと考えられている。藤原顯長は正五位下三河守で仁安2年（1167）に没し、三河国では国司写経を行ったことが知られるが、顯長銘の壺は三島市の錦田村経塚、伝鎌倉出土例、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡例があり、富士山を取り巻く分布から富士山遥拝地での埋経とみる説がある。そのほか、山頂東の満願寺跡には「妙法蓮華經石」（元禄7年 1694）の石塔が立ち、周辺から一字一石経石が見つかっている。『篠井大明神縁起』（宝永7年 1710）によれば、山中の寺平に龍扇禪師が住み、一字一石の法華經埋納を行ったという。

4 甲府盆地北東部の山岳信仰遺跡

甲府盆地の北、長野県境をなす奥秩父山塊の主峰が甲斐金峰山（2598 m 13 柳原 2010）で、甲府盆地からは「五丈岩」の突起が目印となる。五丈岩は山頂近くにそびえる高さ約20mの花崗岩岩体で、太平洋側へ注ぐ笛吹川支流の荒川と日本海へ注ぐ千曲川の「水ノ元種」といわれ、磐座祭祀と水源が結びついている。五丈岩

には、かつて南側に金桜神社本宮があり、文武天皇2年（698）年に金峯山蔵王権現を勧請し、開山については役行者の入山縁起、智証上人円珍による弘仁7年（816）4月8日または仁寿元年（851）3月11日の開山縁起をもつ。五丈岩の名称は「蔵石」、「御影石」、「御像石」と変遷し、「五丈岩」となったのは昭和以降のようである。

五丈岩の本宮（山宮、奥の院）をめざす登拝道、「御岳道」は甲斐国内に東・南・西口の九口があり、別に信濃側（川上村）に北口がある。主な山口には里宮として3つの金桜神社（杣口金桜神社、万力金桜神社、御岳金桜神社）があり、とくに南口を統括する御岳金桜神社（14）は中世以降、御岳信仰の中心として栄えた。摂社、末社は120ともいわれ、山中には滝尾社、飛化頭社、湯谷社、荒川社など水に関わる祠が多い。御岳金桜神社にはかつて3つの宮が並び、境内の鐘は中世以来、「起請の鐘」「秘訣の鐘」として広く知られ、近世には御岳講、御岳代参講で賑わい、「祈願場」と呼ぶ配札囲は信州・武州・駿河・伊豆などに広がっていた。昭和30年に焼失した中宮は室町期の建築で、江戸中期の修復が著しく、東宮は室町期の建築で、内陣に江戸期の厨子を置く仏堂風の建築、神楽殿は1854年に再々建された建物である。境内東側の南北軸線上に仁王門、東宮（弥勒堂）、鐘楼、西側の南北軸線上に随神門、神楽殿、庁屋、里宮本社などを配し、仁王門と隨神門が東西に並び、東を仏堂空間、西を神社空間とする神仏混合の軸線構造を採用している。

境内には修験の流れをくむ弥勒寺（上之坊）をはじめとする6坊があり、社僧、神主、社人で三派組織を構成したといわれるが、東の仏堂空間が弥勒寺である。記録によれば境内「弘法堂」という空海滞在を伝える地に永禄2年（1558）一寺を設け、慶長年中に「弥勒寺」となった。神主家が享保年間（1716～35）に吉田・白河家から神道裁許状を得て急速に神道化すると次第に社僧の姿は消え、弘化3年（1846）頃には無住となり、弥勒寺の坊舎は大破、荒廃した。その後の廢仏毀釈で弥勒寺の仏像・仏具を集めて残らず焼き捨て、天井、板戸、障子、板敷の類、門扉、石敷まで売り払ったという。『甲斐国志』によれば6月15日はかつて行なわれた峯入りの初日で、役行者が水無月（6月）16日に開山したという縁起にちなんでいるが、修験の詳細は不明である。なお神社境内で10世紀前半代の墨書「上」をもつ土師器皿が採集されている（櫛原・岡野1994）。

金峰山では五丈岩南側（本宮跡）、五丈岩北側（「甲斐派美」）、五丈岩西側（千代の吹上）、薬師岳周辺、金峰山小屋（長子の番所、山宮奥の院牛頭天王社跡）のほか、勝手社跡、御室小屋周辺などに遺物が分布する。五丈岩周辺では刀子・火打ち金・鉄製馬形・御正体・鉄鏡片・銭貨・灰釉陶器瓶子、壺、土馬、水晶数珠玉、土製容器片、中世陶器甕片などがあり、とくに五丈岩北側の「甲斐派美」と呼ばれる岩陰から発見された蹴彫り宝相華文をもつ金銅製円板は特筆される。直径12.7cmの円板で、縁に2つの孔を穿ち、真ん中で強く折り曲げており、12・13世紀の何らかの金属製品の鏡板への転用品である。10世紀代の灰釉陶器については経塚以前、五丈岩祭祀の初期段階の遺物である。経筒外容器片と思われる土師質土器片や中世陶器片があることから、12世紀頃に埋経の場であったことは確実で、水晶玉も経塚遺物であろうか。中世段階の遺物には北宋錢を中心とした銭貨が各地点で発見されており、富士山と同様に撒き錢行為が認められる。土馬については時期が不明確ながら中世～近世初頭の祈雨祭祀に関わる遺物と推定でき、鉄製馬形も同様な性格であろう。勝手社跡（2200m 15）は「弁慶の片手回し」と称する高さ15mもの卵形の巨岩を御神体とした磐座の脇にある祠跡で、土鈴2、鉄製刀子1、古銭37が発見され、その内訳は天聖元宝1、古寛永2、新寛永34で、18世紀代前半をピークとする。

御岳金桜神社周辺には窟が多い。甲府市猪狩の昇仙峡ロープウェー乗り場のある城山南麓には複数の窟があり、『官遊紀勝』（功刀2003）にも「左り谷の山ぎしに穴のあきたる所あり」とある。八王子嶺に登る途中の窟では鉄錢の寛永通宝が見つかった例がある。羅漢寺山にある旧羅漢寺跡の裏手、南面の山腹には3箇所の大きな岩陰があり、「一の岳」「二の岳」「三の岳」と呼ばれている（850～900m 16）。自然の岩陰で、内部に壇状の構築を施し、多量の五輪塔、卵塔を主とした石造物を配置する。羅漢寺所有の五百羅漢像は、以前は岩陰の堂に祀られていたとみられ、像の墨書には応永3年（1423）から元亀3年（1572）までの年号、参拝者名等を記す。五輪塔内に焼骨が残る例があり、納骨所的なあり方を呈している。そのほか御岳金桜神社の東側、天狗山の西面に巨大な岩陰があり、岩庇の内側には金桜神社周辺の末社のひとつ、白山社が鎮座する（940m 17 櫛原2006）。

山梨市牧丘町の杣口金桜神社奥社地遺跡 (1000 m 18 山梨市 2006) は杣口金桜神社旧社地で、笛吹川上流、東御殿 (1487 m) 西麓に位置し、御岳道、杣口ルートに近い。現在、杣口の米沢山雲峯寺境内に杣口金桜神社、勝手・子守社があり、社記等によれば山中の旧社殿は天正年中火災により諸堂の大半を焼失、一説には天正 10 年 (1582) 織田勢の川尻秀隆により焼失したのち、吉野平 (二本松) を経て正徳 2 年 (1712) に現在地に移転したといい、寺記に智証上人円珍を開山とするのは『金峯山縁起』と同じである。奥社地遺跡には南に開けた緩斜面に大小 23 面のテラス群が存在し、南北方向を軸線とする 2 つの遺構群が展開する。西側には 3 棟の礎石建物群をコの字状に配置したテラス南側に細長い石段がのびて佛堂域を構成するが、三堂配置は天台寺院に特有な中堂・法華堂・常行堂の三塔配置の系譜を引く。また東側には近世の割拝殿跡から最上段の奥社までの間に石段を整備し、神社域と寺院域が東西に並列した空間構造と推測でき、近世御岳金桜神社の空間構成と共通する。発掘調査の結果、10 世紀前半の土師器を最古の遺物とし、11 ~ 13 世紀前半に山寺が営まれ、15 世紀以降、東側の神社域のみが維持されたようである。なお奥社地遺跡の南側にはテラス群が存在し、それらも関連遺構の可能性がある。

奥社地遺跡と関連するのが柏尾山経塚 (19) 出土の康和 5 年在銘経筒である。昭和 37 年、甲州市勝沼の大善寺東の白山平で偶然発見された経筒には 783 文字 の銘文があり、山城国乙訓郡石上村出身の勧進聖寂円が 63 歳で出家し、康和 2 年 (1099) 正月頃から「甲斐国山東郡内牧山村米沢寺千手觀音宝前籠居」し、如法経書写を発願、康和 5 年 (1103) 4 月 22 日「同山東土白山妙里之峯」に埋納するまでの経緯を記している。文中「山東郡内牧山村米沢寺」は、山梨東郡内の牧山村の米沢寺という意ではあるが、「中」を「ウチ」とも読むことから「中」の誤字とみるならば「中牧山村米沢寺」となる。杣口雲峯寺は山号を米沢山といい、柏尾山大善寺を「柏尾山寺」というように「米沢寺」を米沢山寺と換言すると、雲峰寺の故地、金桜神社奥社地遺跡が中牧山村米沢山寺に比定できる可能性が高い。

山梨市三富町の乾徳山 (2031 m 20) は夢窓国師の一夏面壁の地といわれる。応長元年 (1311) に龍山庵 (淨居寺) に隠棲し、のちに恵林寺を創建するが、その頃乾徳山で修行したといわれ、山頂西側の岩場に国師座禪窟と伝える窟がある。また道満尾根、国師ヶ原、賽の河原、極楽平などの地名、座禅岩、雨乞岩、月見石などの巨岩が点在し、登山口には明和 8 年 (1771) 勧請という乾徳神社、山頂に石祠の奥宮がある。山腹にはヒュッテ裏の登山道沿いに石垣を伴うテラスがあり、細長く石段がのびている (1680 m)。テラス中央には磐座とみられる巨岩「子抱き石」があり、以前には山小屋があつて「前宮」と呼ばれ、昭和初期まで萱葺、籠堂形式の山小屋があり、夢窓国師の木造を祀っていた (原 1935)。磐座をもつ山岳寺院と思われる。登山道脇には役行者の石像があり、付近には錦晶水という水場がある。

笛吹市・山梨市境にある兜山 (913 m 21 兜山 2005) は、推定甲斐国府の北側背後の山並みに構える神奈備形の山で、山腹を巻く岩場に窟、水場、山房跡をもつ小規模な山房跡である (730 m)。窟は南向きの断崖にある円い人工窟で、間口幅 2.8 m、高さ 2.2 m、奥行き 4.1 m を測り、窟前面に小テラスを伴う。窟内には炭化粒を多く含む黒色土が堆積し、その表面に 10 世紀代の土師器片が見られ、時期がわかる人工窟としては最古級である。西側尾根上には水場の窟をはさんで小テラス 3 面があり、最上段のテラスには礎石が存在する。水場の窟と山房をつなぐ岩場には明らかに人工的に削出した通路があり、テラス周辺から山の斜面直下を中心に 10 世紀前半～中頃の細片化した多量の土師器坏類、少量の甕類が分布する。窟からは甲府盆地東部一帯を一望に收め、御坂山地から頭を出した富士山は視界の右端に位置する。

兜山東側には夕狩沢をはさんで妙見山があり、山腹に妙見社 (櫛原 2006) がある。妙見山は兜山よりひとまわり小さいが、神奈備形の山容を呈している。登拝道には丁石が 11 丁まで配置され、山腹には巨大な岩場に懸造の拝殿が建つ (585 m)。甲府盆地を一望する拝殿からの眺めは良好で、御坂山地越しの富士山を視野中央に配し、富士山の眺望、遙拝を明らかに意識している。断崖状の岩場上方には磐座状の巨石がある。拝殿西側の道の痕跡を辿ると前面にテラスをもつ南向きの窟が存在する (566 m 22)。窟内には炭混じりの黒色土が堆積し、内部で火を燃した跡がある。

妙見社東に隣接する大平山（櫛原 2006）には、山麓に御天狗様とも呼ばれる八嶽神社里宮があり、祭礼時に雨乞い儀礼の呪文唱和が行われるという。そこから山道沿いに上ると山腹の巨岩南面に土蔵造りの奥宮社殿(542 m 23) があり、典型的な巨岩祭祀の神社といえる。

山梨市西の大石神社（24）は、巨石の点在する大石山を境内とし、頂上の磐座とみられる巨岩の岩陰に本殿がある。岩手明神ともいい、武田信昌の子、四郎縄美が岩手氏を名乗り、その子能登守信盛が神社を建立したというが、式内社物部神社に比定する説があり、社殿改修の際に中世土器片が採集されている。

山梨市牧丘町の隼地区には国道沿いに石灯籠が立ち、隼穴観音窟(25 櫛原 2006)がある。『甲斐国志』には「麓ノ大土ノ窟横ハ七間深さ十間、大黒ノ窟ハ方二間許リ」とあり、2つの窟が存在する。大土の窟（480 m）は南東向きで前面にテラスがあり、間口が半円形で、幅 4.7 m、高さ 3.3 m、奥行き 7.5 m と大きく、窟内に石仏などがある。自然窟で、壁面の一部に手を加え、四角いほぞ穴を穿つことから、窟内に堂社があったことがわかる。大黒の窟は軟質の岩盤に幅 4 m、高さ 1.8 m、奥行き 4 m の四角い彫り込みを行い、奥壁には高さ 80cm、奥行き 55cm のベンチ状の壇を彫り残したもので、形態的には「やぐら」に類似するが、本来は小諸市布引觀音堂を見るような建物を伴う構造であろう。大黒の窟の類似例に山梨市万力の福聚山靈岩寺があり（350 m 26）、平地の集落に近い崖面に大きな四角い人工窟を穿ち本堂とし、ノミで削ったままの壁面を室内空間とし屋根をかけている。穴觀音として親しまれ、創建は慶長 8 年（1603）以前とされる。

山梨市牧丘町の小槙山南側の妙見山には上人岩窟（27 櫛原 2006）があり、この窟で西源寺の觀音像 133 体が彫られたと伝える。現在、妙見山の東斜面（1150 m）の岩場には石積をともなう小テラスが数面あり、岩陰に祠を祀る。宝暦 2 年（1752）に金剛院が祀ったとされ（山梨教育会 1916）、祠には「金剛坊大徳院」による文化 13 年（1816）の奉納札、文政 2 年（1819）遷宮札を納める。大徳院は山号金峰山で廃寺だが、もとは修驗系の寺院で役行者堂があり、役行者像を保管している。

小槙山の南面にある山梨市牧丘町の戸谷山（1382 m）東斜面には鳥谷觀音窟（1205 m 28 櫛原 2006）がある。開抱山光瞰大和尚が窟で 21 日間の断食行をなしたのち、西保の洞雲寺を開いたといわれ（牧丘町 1980）、急崖の中間に幅 30 m、奥行き 8 m、高さ 8 m ほどの岩陰があり、奥壁寄りに西国三十三番の觀世音菩薩の石仏を祀る。天正 12 年（1582）、西国の六部源右衛門が相州三浦郡より来て断食行を修め、同 15 年までに觀世音像等を安置したというが、今日見られる石仏は近世の作で、近世の觀音靈場のひとつといえる。

杣口金桜神社奥社地遺跡に近い大烏山（1855 m）は、山頂近くの南斜面に雛岩、サンゴウ岩と呼ぶ大きな岩場が巻く特徴的な山である。『奥秩父』によれば山梨市牧丘町室伏の日吉山王神社奥社としてサルタヒコを祀るとあり、サンゴウ岩は山宮（サングウ）、あるいは山王（さんのう）からの転訛と思われる。雛岩からわずかに下った岩場に南向きの窟があり（1624 m 29 櫛原 2006）、間口幅 0.65 m、高さ 3.2 m、奥行き 5.5 m を測る。窟の入り口付近に炭混じりの黒色土が厚く堆積し、窟内右手の壁面には水が滴っている。窟前面には明確なテラスはないが、窟の周辺で鉄鍋片 1 点を採集した。

甲府市横根の光福寺は盆地中央にせり出した八人山の先端に位置し、現在寺の脇に「下の堂」、石段を上り詰めた岩陰に近年改築された「上の堂」がある（340 m 30 櫛原 2006）。上の堂は横根岩堂ともいわれ、庇の出が浅い南向きの岩陰前面に建ち、以前の建物は懸造で伝行基作の十一面觀音を祀り、側に行者堂を設けていた。甲府盆地を見下ろす景勝地で富士山の眺望もよい。手前に六角石幢があり、「上下觀音再建天文十二年三月廿九日」との刻銘があるというが風化が著しい。

甲府市の要害山奥にある岩堂觀音（760 m 31）は深草觀音として有名で、軟質の岩場にいくつかの窟を作出し、露天の窟内に木造の仏像を安置し、多数の石仏を配している。その中で、岩場の高いところに長い鉄の梯子を掛け、内部に拝殿を設けた窟があり、背後には石段状の通路を削り出し、参拝の便宜をはかっている。文化文政期の觀音像が多いことから近世大いに隆盛した觀音靈場といえ、『官遊紀勝』にも紀行文がある。

そのほか甲州市菱山の三光寺は現在淨土真宗だが、もとは天台で創建は推古天皇 3 年（595）、秦河勝開基といわれ、大滝山中に存在した。大滝山には男滝があり、現在大滝不動尊を祀っているが、滝と結びついた山岳寺

院といえる。また『甲斐国志』によれば「雁坂」（**雁坂峠**）には「嶺頭ノ土中ニテ古銭ヲ掘リ得ル事アリ昔時往来ノ人山靈ニ手向セシ所ト云フ」、「大菩薩坂」（**大菩薩峠**）には「峠ニ明見大菩薩社二社アリ（中略）峠ヨリ東ニ下ルコト一里半ニシテ狩場山神ニ至ル小祠アリ神体ハ十一面觀音ノ銅像ナリ相伝ヘテ弘安中長根ノ山上ヨリ掘リ出ス所ナリト云フ」とあり、峠祭祀にも注目したい。

5 御坂山地および郡内方面の山岳信仰遺跡

釧迦ヶ岳（1641 m 32 櫛原 2003）は笛吹市御坂・芦川境に位置する御坂山地の主稜で、山頂付近は岩峰をなし、西側は屏風岩の崖壁となる。御坂山地の中では比較的陥しく、山頂が尖った山容は、甲府盆地側から目を引く存在である。北側山腹には式内社檜峰神社があり、山頂周辺は甲府盆地と富士北麓をつなぐ御坂山中の尾根筋にあたる。山頂では底部片に網代圧痕をもつ縄文時代後期の深鉢形粗製土器2個体以上のほか、土師器片が採集され、甲斐駒ヶ岳の土器同様、信仰的な側面を考慮せざるを得ない。

また甲府市上九一色に同名の釧迦ヶ岳（1271 m 33 畑 1993）がある。清涼寺式釧迦如来立像で有名な古関永泰寺がかつて釧迦ヶ岳山頂にあったと伝えられ、山頂周辺には釧迦屋敷の地名をもつ平地がある。また釧迦ヶ岳の南北には阿難坂、迦葉坂の地名があるのも釧迦にちなむとされる。礎石が残るというが、それらを認めることはできない。

富士河口湖町の十二ヶ岳（1681 m 34 畑 1993）は西湖北側にあり、役行者が富士山に入るのに精進湖で斎戒沐浴をしたのち開いたという山である。『甲斐国志』には東面に役行者の小祠、西面に十二ヶ岳権現の小祠があり、「中古山伏ノ役ノ小角ノ跡ヲタヅネ此ノ峯ニ參籠シ石上ニ端坐シ柴燈護摩修法シテ百日ノ修行セル山ナリトゾ」と記し、護摩修法に使われたらしい平らな石があること、「太刀或ハ陶器ノ破レタル又目ナレヌ壞損シタル古鏡ナド打チマジリテ木葉ノ下或ハ岩石ノ間ナドニスタレテ有ルコト数多シ」と遺物散布にも言及する。十二ヶ岳山頂には石祠があり、周囲では剣形、鎌形鉄製品が採集されている（図2）。

西桂町の三ツ峠山（35 西桂町 1992）は、開運山、御巣鷹山、毛無山の三峰の総称で、巨大な屏風岩の存在を特徴とする。富士講信者で富士信仰に強い影響を受けた天台宗弾誓派の木食修行僧、空胎上人を中心開山とし、天保6年（1835）に参道開削、一字一石経の完成と經塚供養塔の設置、本社、護摩堂などの再建などの山内整備が集中的に行われた。山頂に3つの峰をもつこの山を富士山に擬して山中の窟、岩場での修行が重視されたといわれる。それ以前の山岳信仰は明確ではないが、岩屋觀音窟には延享3年（1746）の石仏があるほか、山麓の白糸の滝の存在も大きい。富士山の眺望に優れ、七面山などと同様に、富士山遥拝の山であり、富士山信仰の一側面を見出すことができる。また峠という山名が示すように交通路としての機能をもち、甲斐から武藏、国中から郡内に至る脇道的な存在である。山頂周辺には平安時代の土師器片が採集でき、山岳信仰の視点での検討を要する。

都留市にある御正体山（1681 m 36 紙谷 1992）は道志山塊の最高峰で、桂川をはさんで三ツ峠山と対峙する信仰の山である。登拝口には道志口、鹿留口、細野口の3口があり、山頂に御正体権現を祀り、細野口と鹿留口に里宮がある。雨乞い、日照り乞いに靈験があるとされている。

大月市岩殿山（634 m 大月市 1998）は巨大な岩体を山体とし、山上に岩殿城跡がある。山体自体が神聖を帯びることから信仰対象となったことが考えられ、山上の調査ではわずかに土師器片が見つかっている。東側に七社権現窟、北側に新宮窟があり、東側山腹には円通寺七社権現跡がある（545 m 37）。七社権現窟は自然窟で、延享2年（1745）の絵図には懸造の建物を描き、真蔵院に安置する15世紀初頭の七社権現像（箱根・伊豆・日光・藏王・白山・山王・熊野）はもと七社権現堂内に祀られていた。また新宮窟（404 m）は自然窟で、幅35 m、奥行き16 mあり、延享2年（1745）の絵図には妻を正面にして屋根に滝のように水が落ちる懸造の拝殿を描く。真蔵院の十一面觀音像2体のうち1体は11世紀の作で、傷みが著しいことから新宮窟本尊と推測されている。14～15世紀には熊野信仰の拠点として隆盛し、文明19年（1487）には聖護院道興が訪れた名刹である。

6まとめ

山岳信仰の場に伴う構成要素として磐座（金峰山、地蔵ヶ岳、妙見山妙見堂、八嶽神社山宮、三ツ峠山、七面

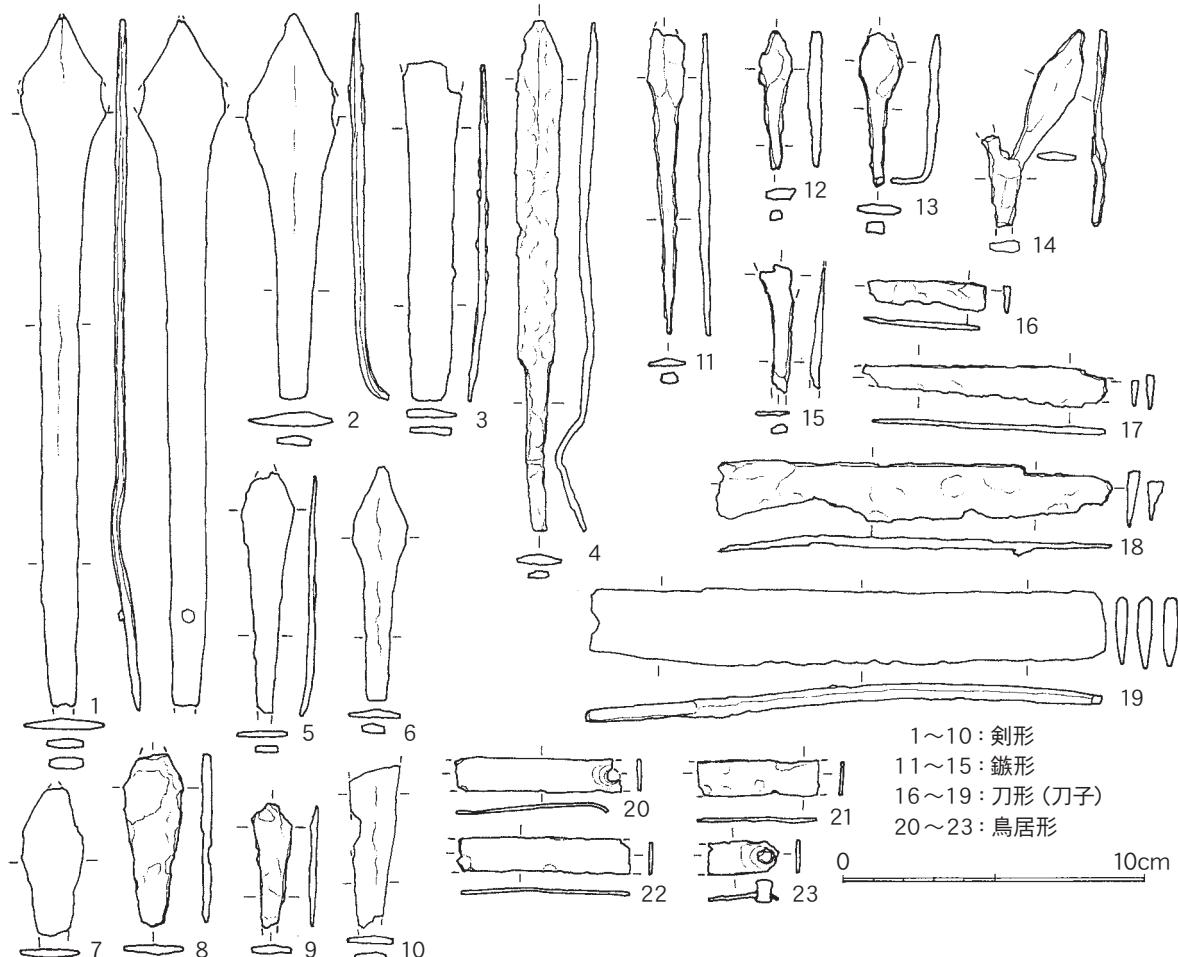


図2 十二ヶ岳山頂鉄製品 (1~3・5~7・10・19は畠1993を改変、他は2006年櫛原および篠原武による採集試料)

山奥の院影向岩等)、窟(兜山、岩殿山七社権現窟・新宮窟、千頭星山天狗岩の窟、大烏山の窟、隼大士の窟・大黒の窟、御岳金桜神社白山窟等)、滝(大滝山、七面山、地蔵ヶ岳、三ツ峠山等)、池(大笹池、椹池、四尾連湖等)で分類することは可能であり、さらに立地、標高などを指標に細分することもできる。地域的には甲府盆地北縁の盆地に面した山々に窟が分布し、金峰山信仰、御岳道との関連がうかがえ、韮崎市周辺の南アルプス山麓に点在する池には雨乞い信仰が認められる。

信仰遺物で特徴的なのは権現岳、地蔵ヶ岳の薙鎌で、『甲斐国志』によれば金峰山山宮宝物に「焼鎌」とあることから金峰山での薙鎌の存在が推定でき、山梨県内では長野県境に近い北西域に薙鎌分布が認められる。薙鎌は各地の諏訪神社での御柱祭に伴い神木選定の際の依り代として用いられているが、南アルプス市上今諏訪の諏訪神社宝物に2点の薙鎌がある(白根町 1967)。薙鎌は諏訪信仰圏の祭祀具で、雨乞い、風祀りなど多様な願意のもとに用いられた依り代で、その分布圏は日本全国に及び、長野県東信地域を分布の中心とし、基本的には諏訪信仰の広がりの中で理解できる遺物である。長野県川上村御陵山では剣形、容器形、剣形、弓矢形などの鉄製品とともに薙鎌が存在し、地蔵ヶ岳にも薙鎌とともに剣形が存在することから鉄製品を用いた同様な祭祀・信仰形態を想定できる。川上村では雨乞い祭祀の際、山上の祠の剣形、刀形を借用し、集落内の河原で祭祀を行った後、同じものを作って祠に戻す、という地蔵ヶ岳の地蔵信仰に似た行為の結果、形態が類似した製品が多数存在すると考えられる。剣形、刀形鉄製品については全国各地に分布し、とくに山岳信仰に限らず神社、祠の奉納品として普遍的に存在する信仰遺物であり、十二ヶ岳にもまとまって存在する。

七面山、三ツ峠山で重要視される富士山遥拝については、山梨市妙見山、乾徳山、篠井山等で認められ、富士山を擁する本地域独自の一種の信仰のかたちといえる。この視点については紙谷威廣氏がすでに指摘するところであり(1992)、富士山信仰の古い信仰形態はその姿を遠方から望む遥拝にあり、中世以降に発達した富士山登

拝行の成立以前、修行者が正式に行う行とは別に富士山遙拝を重要視し、日蓮宗でも日蓮が太陽崇敬したことに重ねて、七面山で御来光遙拝を重視するのではないかと推測されている。甲府盆地の乾徳山の夢窓国師座禅窟や兜山の窟については、悟りを得るため富士山に向き合う一種の修行窟とみることもでき、富士山を拝む遙拝行が窟と結びついて変化した宗教行為とも考えられる。

山岳信仰の変遷を時期的に整理すると、縄文後期、古墳前期の土器をもつ釧路ヶ岳、甲斐駒ヶ岳については検討の余地があるが、10世紀代には金峰山五丈岩において山岳信仰と磐座祭祀の融合が認められる。10世紀前半に兜山、11世紀に岩殿山に窟を伴う山岳寺院の存在があり、10世紀後半には苗敷山で宗教活動が始まり、11・12世紀には杣口金桜神社奥社地遺跡で天台系山岳寺院が建立された。12・13世紀には金峰山五丈岩のほか各地の山岳寺院周辺で経塚造営が行われ、それらの中には篠井山のように富士山を意識した場の選定が行われている。15・16世紀には羅漢寺、御岳金桜神社などへの参拝が盛んとなり、地蔵ヶ岳などの高山にも登拝者が増加する。その背景には守護武田氏の庇護、一般民衆の山岳登拝に対する関心の高まりを指摘でき、15世紀以降に隆盛する富士山登拝との関連がうかがえる。近世には三ツ峠山に富士講の影響が現われるほか、岩屋観音、岩堂観音、鳥谷観音など観音靈場として発展した窟が多い。

ところで甲州市塩山藤木から山梨市小原東、勝沼休憩の立正寺方面に至る道は「道者道」、「道者街道」と呼ばれ、河口湖周辺にも断続的に存在する。富士道者が往き來した道といわれ(堀内 1993)、金峰山北口、川上村内にも「道者道」、「行者道」と呼ぶ道がある。『甲斐国志』には杣口藏王権現(雲峰寺)より金峰山へ至る道、および黒駒への道を「道者海道」と記しているが、このことについて若干の推論を述べておきたい。

大善寺東の白山平で発見された経筒は米沢山寺で写経され、今日の杣口金桜神社奥社地遺跡を写経所の山岳寺院跡と推定したが、杣口(米沢山寺)から大善寺(柏尾山寺)まで埋経に際して通ったルートを想定すると御岳道の杣口ルートと一部重なる。このルートは秩父方面からに道者が雁坂峠を越えて富士山参詣のため通過したルートであり、また杣口から金峰山に至る道でもあり、各地の山を巡礼する道者にとって、道者街道沿いの立正寺とともに甲州きっての名刹大善寺が重要な巡礼地、結節点となっていたことを示している。

大善寺には今日、御坂峠にあったという役行者像を武田信春のときに境内の六所明神に移したという行者堂があり、5月8日(古くは旧暦4月14日)に藤切会式の祭礼を行う。『甲斐国志』によれば「庭上ニ三丈許ノ柱ヲ建テ藤蔓ヲ繩トシ纏之修驗者一人柱ノ上ニ攀テ修法シ終リテ剣ヲ以テ其ノ繩ヲ両断トナシ地ニ墜スヲ香花群集ノ人噪ギ立テ左右ニ之ヲ引キ勝負ヲ争フコトヲ旧式トス之ヲ柏尾ノ藤切ト謂フ」とあり、高さ三間半の御神木から七尋半の大蛇を象った藤の根を切り落とすという修驗系の柱松行事で、修驗における春の峯入り儀礼を意味し、富士(藤)山入峯を暗示する。『勝沼古事記』には、享保20年(1735)に「四月十四日山伏祭り木登等当年より休」とあり(山梨2008)、少なくともそれ以前には4月14日に行われていた。また大善寺の対岸にある上岩崎権現平では8月22日に浅間神社の火祭り(柱松行事)が行われ、大正以前には4月3日にも行われていた。吉田の火祭りにならったものといわれ、富士浅間神社との結びつきを示している(勝沼町1962)。

大善寺と同様の祭礼は甲府市七覚の円楽寺にもかつて存在し、4月15日に五社権現祭礼として「真木伐り」と称した。『甲斐国志』には「役ノ行者富士入峰ノ粧ナリ真木トテ長二丈八尺ノ柱ヲ建テ柴ヲ附ケ藤ニテ二十八所結ヒ先達修驗一人攀上リ寺宝ノ百足丸ト云太刀ヲ以テ伐之七覚ノ真木伐トテ州人為群衆ナリ」とあり、二丈八尺、二十八所にみる28という数字は富士山への宿(拝所)の数を示唆する。円楽寺は富士山二合目の役行者堂を兼帶し甲州側の富士山修驗を統括した寺院であった。

大善寺の藤切会式では、役行者が金峰山の蛇に見立てた藤の根を切る行為を演じるが、これは吉野金峰山での役行者の大蛇退治の故事に基づくといわれる。この点について想起されるのが『金峯山縁起』(由井1983、櫛原・岡野1994)の中で甲斐金峰山の五丈岩を蛇体として、大日如来の化身とみなすことと、『甲斐国志』に五丈岩北側の岩あるいは五丈岩そのものを「甲斐派美」と呼び水の元種と認識していることで、「派美」とは蛇を意味する。藤切会式では本堂(薬師堂)前の白峯三山に見立てた三石を踏み越え(三山渡り)、藤切りの柱に行者が取り付くことから、甲斐に入った役行者が甲斐金峰山の大蛇を退治して入峯の道を開いたという縁起を祭礼化したと考え

るのが自然で、大善寺が富士山方面から金峰山方面に向う経由地点であるのも示唆的である。大善寺は別名「三枝寺」で、在庁官人三枝氏の氏寺と考えられているが、大善寺が甲斐国の北鎮とされた金峰山と宗教的な紐帯を有した証左ではないだろうか。

さらに荒唐無稽かもしれないが、祭礼の開催日と埋経の行われた月日に近似性がある点を指摘したい。藤切会式の中世以前の経緯については不明だが、大善寺最大の年中行事として4月14日に行われてきたと考えると、康和5年の埋経を4月3日の叡山学者堯範の開講演説ののち、やや日を置いて4月22日を埋納日としたのは、柏尾山寺の行事に合わせて、あるいはそれを避けて埋経を実施したと想像できる。經筒銘の「立並る結縁衆路頭ニ无隙かりき」という文言は、まさに祭礼時の賑わいそのものといえるであろう。大善寺はもと天台寺院で、『金峰山縁起』によれば智鉢上人が金峰山を中興開山したのが卯月（4月）8日であり、4月8日の天台宗の灌仏会、14日の山王祭との関連も考えられる。ただし今日、大善寺と金峰山信仰との関連、入峯や修験についての史料はなく、康和五年銘經筒にも金峰山、藏王権現に関する記載がないことから、あくまでも仮説に留めざるを得ない。ついでながら『夫木和歌抄』（12世紀末）の「題知らず、梁塵秘抄」の歌に注目しておく。

「甲斐にをかしき山の名は、白根波崎塩の山、室伏柏尾山、篠の茂れるねはま山」

「ねはま山」とは根場山、つまり根場集落背後の十二ヶ岳から王岳を指し「室伏」とは山梨市牧丘町室伏のことで、「室伏」を山と認識し、室伏と柏尾山をセットとする点に注目すると、一方の柏尾山が甲州での天台の拠点であることから、「室伏」はやはり天台色の濃い日吉山王神社から米沢山寺一帯を指すとみられ、室伏が米沢山寺そのものを指した可能性があるのではないか。仙口金桜神社社記に米沢山雲峰寺の前身寺院を「米澤山大禪寺」と記しているのも、大善寺との関連を暗示して興味深い（山梨市 2006）。

本稿は筆者がいくつかの小論、報告に記載した内容を引用し、県内山岳信仰遺跡の分布調査という主旨にもとづき整理したものであるが、富士山信仰から逸れて金峰山信仰に偏った考察になった点をお詫びしたい。

参考文献

- 大月市教育委員会・岩殿山総合学術研究会 1998『岩殿山の総合研究』
荻生徂徠『峠中紀行』1703（宝永3）1981『甲斐志料集成三 日本紀行篇』
兜山遺跡群調査研究グループ 2005『笛吹市春日居町兜山遺跡群の調査』『山梨県考古学協会誌』15
勝沼町 1962『勝沼町誌』
紙谷威廣 1992『富士信仰と木食僧集団』『三ツ峠山の信仰と民俗』西桂町教育委員会
清雲俊元 1978『甲斐金峰山と修験道』『富士・御岳と中部靈山』山岳宗教研究叢書9
櫛原功一・岡野秀典 1994『甲斐金峰山の信仰』『丘陵』14
櫛原功一 2003『山岳遺跡での考古学的調査—甲州での近年の調査事例から—』『帝京大学山梨文化財研究所報』46
櫛原功一 2006『甲斐の窟の諸相—修行窟を中心に—』『山梨県考古学協会誌』16
櫛原功一 2007『柏尾山経塚の復元』『山梨県考古学協会誌』17
櫛原功一 2008『頂から窟へ』『山の考古学研究会会報』20
櫛原功一 2010『甲斐金峰山と金桜神社』『山岳信仰と考古学II』同成社
功刀利夫 2003『渋江長伯著 官遊起勝 注釈と余話』
校訂佐藤八郎 1971『甲斐国志』大日本地誌体系
斎藤秀樹 2011『大笛池の雨乞い信仰』『苗敷山の総合研究』 善崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会
七面山石造物調査グループ 2011『七面山の武藏型板碑—明淨院墓地と丁石の調査—』『山梨県考古学協会誌』20
白根町 1967『白根町誌』
辻本満丸 1908『鳳凰山第二回登山記』『山岳』2-3号
西桂町教育委員会 1992『三ツ峠山の信仰と民俗』
善崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会 2011『苗敷山の総合研究』
畠大介 1993『芦川村周辺の山岳信仰遺跡』『甲斐路』77 山梨郷土研究会
原全教 1935『奥秩父 統』
堀内真 1993『富士参詣の道者道と富士道』『甲斐路』76
牧丘町 1980『牧丘町誌』
山梨教育会東山梨支部 1916『東山梨郡誌』
山梨県 2003『山梨県史 資料編7 中世4 考古資料』
山梨歴史美術研究会 2008『大善寺』山梨歴史美術シリーズ2
山梨市教育委員会 2006『仙口金桜神社奥社地遺跡』山梨市文化財調査報告書 第10集
山本義孝 2011『苗敷山周辺の山岳信仰』『苗敷山の総合研究』善崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会
由井港 1983『金峯山縁起』『修験道史料集（I）東日本編』山岳宗教研究叢書17